

欲望と因果関係

～『システムにとって意図とは何か』の分析を中心に～

2014年4月2日

宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

<目次> ※()内はページ

- I. はじめに (1)
- II. 因果関係とは～“関係”は私たちの直接経験としては現れてこない (3)
- III. 欲望は言葉（概念）である (6)
- IV. コミュニケーション理論の問題点～“システム”は観察者の主観にすぎない (10)
- V. 意図→行為の因果関係は成立しない (14)

I. はじめに

本稿は、入江幸男氏のホームページ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~irie/>)
内の、学生の優秀な論文の紹介コーナー
(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~irie/papers%20by%20students/students'papers.htm>)
で紹介されている、前田修吾氏の卒論

システムにとって意図とは何か (1999年)

<http://shugo.net/thesis/>

の分析をとおして欲望と因果関係についてより深い考察を試みるものである。

前田氏の問題意識に対しては、強い共感をもって読ませていただいた。私自身も意図と行為との関係について懐疑的であり、もっと厳密に検証しなければならないと感じていた。卒業論文でこのようなレベルのものを書けるとは、私にとっては驚きである。

前田氏の論文の目的は次のとおりである。

意図と行為の関係は因果関係であるという、古くからある常識的な説明は、デイヴィドソンが主張するように、正しいのだろうか。車のエンジンをかけたり、散歩をしていて、ふと空を見あげたり、といった行為すべてに行為に先行する意図というものが存在するのだろうか。（前田氏，1999）

意図と行為との関係が疑わしい、というのは私も日ごろ感じていることなので、この問題意識には共感する。

私はまず蜜柑の皮を剥こうと意図し、そして蜜柑の皮を剥くのだろうか。これは不自然な考え方のように思われる。また、仮にそのような意図を取り出すことができたとしても、その意図と行為の関係は因果関係とは異なるのではないか。実際、金属の加熱とその膨張といった自然的因果関係と、意図と行為の関係は随分性質が異なるように思われる。（前田氏，1999）

このように考えるのももっともであろう。

ただし、この論文が扱う内容を考える上で、まず明確にしておかなければならない論点があると思う。意図と行為との関係や因果関係の有無について論じるのであれば、まずは意図（つまり欲望）とは何か、そして因果関係とは何か、ということについて厳密に論じておく必要があるのではなかろうか。

前田氏の論文においては、ここが不明確なまま考察がなされているのである。そこを飛ばしてコミュニケーション理論を援用したところで、結局は肝心なところが理解できずに分析が終わってしまうだけなのである。

II. 因果関係とは～“関係”は私たちの直接経験としては現れてこない

例えば、「因果関係とは何か」という問題に対し、「私は〇〇と思う、〇〇が因果関係である」、「私は××だと思う」と、お互いに自らの直観のみを主張したところで、解決に至ることはない。それぞれが根拠を示せないからである。

私たちが確かであろうと言えることは、結局は私たちが実際に体験したことのみである。それが勘違いであろうとなかろうと、錯覚であろうとなかろうと、実際に体験・経験したことは体験したことに違いないからである（つまり現象学における直接経験の明証性）。そして、それら私たちの体験を出発点にして議論を始めるしか私たちには方法がないのである。なぜなら私たちには自らの体験しか与えられていないからだ。

そのとき重要なことは、実際に私たちが体験したことは何か、そして体験していないことは何かを厳密に見直すことである。「推測した」ということは確かに一つの体験ではあるが、その推測したこと（つまり対象）“そのもの”が実際に体験として現れているのか、仮に体験していなければやはり体験していないのである。

そうすると“真理”と思われているものも結局は私たちの“確信”にすぎないことが分かってくる。つまり、私たちの体験上においては、「正しいと思った」という事実があるのみで、客観的真理が私たちの“外”に存在しているわけではないのである。

これは因果関係についても同じである。実際のところ「**事象と事象との間に関係を認めた（確信した）**」という**体験上の事実があるだけ**なのだ。

木が燃えたら灰になったのを見た

・・・とする。このとき、私たちが実際に体験したことは、

- ・ 木を見た
- ・ 木が燃えるのを見た（火を見た）
- ・ 灰が残った

ということだけである。「木が燃えた“故に”灰が残った」というのは、あくまで私が“思った”ことである。“なぜ”、“故に”、とは、あくまで私が“思った”ことであり、その“メカニズム”、事象と事象との“関係そのもの”の体験は、どこを探してもないのである。「木が燃えたから灰になることは“当たり前”じゃないか」と考えたところで、それもあくまで当たり前だと“思った”ことなのである。

「木に火がついたから灰になった」という因果関係を把握するという事は、その因果関係を私が“認めた”という事実があるだけで、「木が燃えるのを見た」という事象と、「灰を見た」という事象の間の“関係”とは何か？と聞かれても、それは“謎”なのである。“関係”という体験そのものを探しても見つかることはない。そして、因果関係を認めた時点において、木が灰になるメカニズムも、私たちの体験として与えられてはいない。当然のことではあるが、木がセルロースやリグニン、その他様々なミネラルなどで形成されている、ということは与えられないし、それが燃焼によって酸化されることで様々な成分へ変化していく事実もその時点においては直接経験としては与えられていない。

私たちは、事象と事象との“関係”に確信を持つために、その“メカニズム”を明らかにしようとする。しかし、この“関係”の“謎”は常についてまわる。

たとえば木を分析するにしても、硫酸で他の成分を溶解した後の残渣をリグニン量とする（高橋勤子「木材の成分分析法と蒸気処理による成分変化について」『愛産研ニュース』2008年11月号3ページより）とあるが、実験の結果として（おおざっぱに言えば）、

- ・木がある
- ・硫酸で処理した
- ・リグニンが残った

という体験があるのみで、それら事象の“関係”そのものが私たちの体験として与えられていないことは同じである。処理した残渣がリグニンかどうかを同定する分析実験についても同じことが言える。

さらに言えば、ある事象とある事象との因果関係を説明するための“メカニズム”として、様々な要素の関係を示そうとしても、“すべての”要素を拾えるのかどうかは疑わしい上、要素の選定が恣意的である可能性もぬぐえない。因果関係が生じるメカニズムを分析しようとしたところで、それらも要素と要素との因果関係の連鎖でしかなく、その因果関係もやはり究極的には“謎”なのである。

私たちの認識は究極的には、私たちの体験が因果関係によって生じているのではなく、体験が現れた後にそれが因果関係によって生じたのではないか、と考えた事実があるだけなのだ。

これは自然科学、社会科学・心理学、いずれも同じである。「因果関係」および「客観性」というものの構造は、自然科学であろうが社会科学・心理学であろうが、実は一貫しているのだ。（「客観性」原理により科学が成立していると言えるが、これについては別の機会に説明したい）

前田氏はこう述べている。

「右手を上げようと意図し、そして右手を上げた」という表現と「右手を上げようと意図し、それ故右手を上げた」という表現の間に横たわる溝は深い。(前田氏, 1999)

果たしてそうであろうか？ 仮に、ある人が右手を上げようと明確に認識して、そして右手を上げたとする。因果関係とは結局のところ、「右手を上げようと明確に認識した」体験と、「右手を上げた」という体験が、一連のものであるという認識のもと、その二つの体験・現象の間に関係を認めた、それだけなのである。

” 故に” というメカニズムは結局のところ、私たちにとっては” 謎” のままであり、どう考えてみたところで、” 関係” があるのかないのか、さらにはその” 関係” とは何なのか、それさえも私たちにはわからないのである。

それが因果関係である。

※ 科学が成立するための「客観性」原理に関しては、以下のブログ記事で分析を行っているので、興味のある方はご覧になってください。

社会科学と因果関係
<http://miya.aki.gs/mblog/?cat=7>

「現象学的明証性とエビデンスをめぐって」検証
<http://miya.aki.gs/mblog/?cat=8>

Ⅲ. 欲望は言葉（概念）である

1. 様々な状況を考慮した上で、私は「〇〇がしたい」と結論づけた場合

先に「〇〇がしたい」と考えたわけではないが、自分のこれまでの感情や行為を振り返って「私は〇〇がしたいのだ」「〇〇がしたかったのだ」と結論づけることがある。

要するに、私たちの体験後に後付けで欲望を把握（概念化）したわけである。おそらくであるが、様々な感覚、これまでに自らが置かれたシチュエーション、あるいは自らがしてしまった行為など、様々な出来事を振り返った上で、後付けで「私は〇〇がしたかったのだ」と考えたのかもしれない。

ここでも、直接に私たちが体験・経験したことを厳密に振り返ってみると、

- ・ 様々な体感感覚、感情・情動のような感覚
- ・ 自らが置かれた環境・状況、シチュエーション
- ・ これまでの自らの行為やその結果など、様々な出来事
- ・ 「〇〇したい」と言葉にしたこと、考えたこと、あるいは何かに書いたこと

重要なことは、欲望”そのもの”のような実体、本体を、これら体験から探してみてもどこにも見つからないということである。

たとえば、机の上にリンゴが置いてあったのを見つけ、それに飛びついて食べてしまったとする。このとき、実際にどのような体験をしているであろうか？

- ・ 目の前に何かを見つけた
- ・ 思わず飛びついた
- ・ それを食べた

ということである。このとき私たちはいちいち、

- ・ これはリンゴである
- ・ 私はリンゴが好きである
- ・ だからリンゴに飛びついて食べてしまった
- ・ 私はリンゴを食べたかったのだ

と判断しながら行為するであろうか？ 日常生活においては、いちいち意識的に概念化せずとも勝手に体が動いて食べているであろう。つまり、上記の内容（リンゴである、リンゴを食べたかったのだ、など）は、行為の後、事後的に分析したメカニズムであると言える。これらは私たちが実際に行為した時点において体験されていないものである。「私はリンゴを食べたかったのだ」という事後的な説明は、あくまで言葉における説明であって、「リンゴを食べたい」という“欲望そのもの”を私たちは実際には体験などしていないのである。

因果関係とは、体験と体験との間に“関係”を“認める”ということであった。すなわち体験していないことについて因果関係を見出すことはそもそもが不可能である。つまり、「意図（欲望）→行為」という因果関係は成立しようがないのである。

2. 「〇〇したい」と思ったり呟いてしまったりした場合

「遊びたいなあ」とふと呟いたとする。

別に、その時に感じた体感感覚や、自らが置かれたシチュエーション、これまでの出来事などを意識的に総合しながら「遊びたい」という欲望を概念化したわけではないであろう。ただ、ふと「遊びたいなあ」と呟いたのではなかろうか。そして、「遊びたいなあ」と呟いた、この行為それ自体は、疑いようのない直接経験である。

しかし、直接経験として体験したのは、「遊びたいなあ」という呟きのみである。「遊びたいなあ」という言葉が出てきた、その言葉に対応する”何か”が、別の体験として私に何かあっただろうか？ 「何かあるはずだ」では直接経験にはならない。それは因果関係という枠組みを用いた”推測”である。言葉以外に”欲望”と言える”何か”を体験していなければ、それはやはり体験していないのである。

「遊びたいなあ」と呟いた後、自らを振り返ってみたらどうであろうか？

- ・休みなのに何もせずだらだらしている
- ・仕事ばかりで休む暇もない日々を送っている、それがつまらないと感じている
- ・何か心に苦しいような空しさのようなものを感じている
- ・体がうずうずしているような気がする

このようになぜ「遊びたいなあ」と思ったのか、心当たりのある理由を探すことはできよう。そして、これら一連の体験から「遊びたいなあ」という欲望が言葉になったのであろう、という目星はつけられる。しかし、それですべてが説明できているのか、あるいはもっと別の理由があるのか、わからない部分も常に残ってしまう。

さらに「遊びたいなあ」と呟いてはみたが、実際に「遊びたいなあ」と思ったのか、それともひょっとして何か別の感情の絡み合いの中で「遊びたいなあ」という言葉が出てしまっただけなのか？そこは可疑的である。

「遊びたい」と欲望を概念化してはみたが、

- ・ひょっとして、「誰かと会いたい」「誰かとおしゃべりしたい」のかもしれないし、
- ・単に「家にいたくない」のかもしれない。

様々な状況・出来事、さらには自らの感情（快・不快など）やその他体感感覚をさらに深く詳細に振り返ってみれば、もっとしっくり来る言葉（概念としての欲望）が見つかる可能性もある。

このように、私たちが実際に体験していることは何かを厳密に見直してみれば、「欲望」とは、あくまで「〇〇したい」という言葉・概念である、ということなのだ。「遊びたいなあ」と呟いたとき、直接経験としては「遊びたいなあ」という”言葉”を呟いたことだけである。

- ・「遊ぶ」という言葉の意味を理解しているからとか、
- ・「遊ぶ」という言葉をどこかで習って知っているからとか、

そういうことは、呟いた時点において体験さえしていないのである。

「遊ぶ」という言葉をどこかで習っていて、「遊ぶ」という言葉の意味を理解していて、脳でそれらの情報を統合して「遊びたいなあ」という言葉になった

という一連のメカニズムは私たちの直接経験としては決して現れてきてはいない。それらは事後的な分析による体験の構成、因果関係の連鎖、客観世界の構築である。

私たちが「遊びたいなあ」と呟いたとき、私たちが体験したことは、とにかく呟いたことだけなのだ。

前田氏の論文に戻る。

アンスコムは意図的行為を内在的な意図によって規定する考え方を退け、「何故？」という問がある振舞いに適用できることによって、その振舞いを意図的行為とみなす。（前田氏，1999）

このアンスコムのお考え方は、まさに欲望そのものが後付けで認識されるものであることを示しているといえよう。

例えば、「何故あなたはポンプを押しているのか」という問に対して「水槽に飲み水を補給するためだ」という答が与えられたならば、「彼は水槽に飲み水を補給している」と言うことができる。つまり意図による説明は行為を再記述することによって、他のコンテキストにその行為を位置づけ、解釈を与えるのである。（前田氏，1999）

この記述も同様に、欲望の把握とは、結局のところ後付けのストーリー構築であることを示している。

さらに言えば「水槽に飲み水を補給するため」に「ポンプを押した」という関連付けは、本当にそうなのか？と疑うことが可能である。

結果として飲み水を補給したのかもしれないが、ひょっとしてポンプを押す行為が好きだけかもしれないし、何か私たちの知らない不思議な”何か”が私たちを突き動かしているのかもしれない。あるいは全く何も意図せず、単に水を汲んで飲んだだけなのかもしれない。

ただ言えることは、上記のアンスコムのお事例においては、「水槽に飲み水を補給するため」という行為の目的を、一連の体験から導き出したという事実がある、ということである。しかし、「水槽に飲み水を補給するため」という目的把握（つまり欲望把握）は、可疑的でもあるのだ。

IV. コミュニケーション理論の問題点～“システム”は観察者の主観にすぎない

以下は、前田氏によるルーマンのコミュニケーション理論の説明である。

ルーマンは初期の論考では社会システムの構成要素を行為であるとしていた。しかし、後に彼は社会システムの構成素をコミュニケーションとする考えに到っている。(前田氏, 1999)

ルーマンはこのように問題を孕んだ移転メタファーを放棄し、コミュニケーションを情報・伝達・理解という三極の選択過程の統一であるとする。コミュニケーションに際して、送り手は伝える情報を諸可能性のレパートリーの中から選択し、さらに、その情報の伝達の仕方を選択する。例えば、食事の提案という情報を選択し、「お腹空かない？」といった伝達方法を選択する。ここでさらに、受け手によって第三の選択が、情報と伝達との間の区別に基づいて行われる。この選択がコミュニケーションにおける理解という局面である。例えば、先のコミュニケーションの例では食事の提案として理解されることもある得るし、単なる質問として理解されることもある得る。前者の場合は「じゃあ、ハンバーガーでも食べようか」といった形で、あるいは後者の場合なら「いや、空いてないよ」という形でさらに次のコミュニケーションが生み出され、コミュニケーションの自己準拠的な産出過程のネットワークが形成される。このようにして社会システムはオートポイエシスを実現することになる。(前田氏, 1999)

コミュニケーションにおける理解という局面をもう少し詳しく見ると、個々のコミュニケーションにおいては理解と誤解を区別できないことに気づく。コミュニケーションにおける理解を誤解として修正するためには、そのコミュニケーションに接続する、そのコミュニケーションについてのコミュニケーションが必要とされるのである。例えば、「お腹空かない？」「いや、空いてないよ」「食事に行こうという意味で言ったんだけど」「それはわかってるけど、今は行きたくないという意味で言ったんだ」などというように。コミュニケーションは常に何かについてのコミュニケーションであり、その意味でコミュニケーションは意識と同様に志向性を持っているが、コミュニケーションがコミュニケーションを志向する時、そのコミュニケーションは再帰的コミュニケーションであると言える。コミュニケーションの理解が再帰的コミュニケ

ーションによってのみ、調整されるということは、メタ商品である貨幣も一つの商品であらざるを得ないのと同様に、メタ・コミュニケーションも一つのコミュニケーションであらざるを得ないということを示している。（前田氏，1999）

・・・これらコミュニケーションに関するルーマンの説明は、もっともであるようにも思える。ただ、ここで私としては指摘しておかねばならないことがある。これらルーマンの説明は、あくまでルーマンが構築した”ストーリー”である。もちろんそれが間違っていると言っているのではないが。

たとえば、AさんがBさんに向かって「いい天気だね」と言ったとする。そのとき、Aさんは、ただ「いい天気だね」と言っただけである。Aさんがそのとき何も考えず、ただ「いい天気だね」と言ってしまっただけなのだとしたら、果たして、そこにメタなコミュニケーションを行おうとした意図が実際に存在していると明確に断言できるであろうか？

ルーマンは、行為とコミュニケーションを分けて考えているようであるが、実際のところ、上の記述を見る限りでは、

意図→行為

という構図の応用でしかないようにも思えるのである。”コミュニケーションは意識と同様に志向性を持っている”というルーマン（前田氏？）の認識は、あくまで彼（彼ら）がそう”信じている”だけであり、実際にそうであるか断言できるとは限らないのである。「お腹空かない？」と喋った、その喋ったこと（つまり実質的には「行為」）に、意図はあるのか？そこに、本当に伝えたかった意図があるのか？ということになってしまうのである。第三章で私が指摘したように、このようなメタな“意図”、あるいは“システム”そのものを私たちは実際には体験などしていない。

あくまで前田氏の論文を読んだ上での印象であるが、オートポイエーシス理論、コミュニケーション理論を引き合いに出したところで、問題の構図は変わらないのではなかろうか。結局、「お腹空かない？」と喋った“行為”に対し、それを喋った「意図」というものが存在し、そこに”因果関係”があるのかどうか、という問題意識に戻ってしまうのである。

それぞれの行為は、帰属の過程をとおして構成される。行為が成立するのは、なんらかの根拠からか、なんらかのコンテクストにおいて、なんらかのゼマントイク(「意図」「動機」「利害関心」)によって、選択がシステムに帰属されることによってなのである。この行為概念は、心理的なものを顧慮しないがゆえに、行為についての十分な因果的説明をおこないえないことは明白である。- したがって、個々の行為が何であるのかということは、なんらかの社会的描写に基づいてしか突き止めることができない。だからといって、行為が社会的状況においてのみ可能であるというのではないが、個々の状況において、個々の行為が一連の行動の流れから際立ってくるのは、なんらかの社会的描写において個々の行為が行為として確認されるばあいにかぎられるのである。そのようにしてのみ、行為は、その統一体を獲得するのであり、その始まりと終わりを見いだすのである。もっともそのさい、生命のオートポイエーシス、意識のオートポイエーシスあるいは社会的コミュニケーションのオートポイエーシスは進行し続けている。(ルーマン『社会システム理論』第4章第8節、前田氏(1999)からの引用)

ルーマンは「システム」という言葉を用いているが、「選択がシステムに帰属する」とはどういうことであろうか？

そもそもが、そういった「システム」があると確信するのは、あくまで観察者自身である。行為に根拠があるか、あるいは行為が何らかのコンテクストの中で行われているのか、それを判断するのは、行為者自身、あるいはその行為を観察した観察者のみである。そして、

- ①コミュニケーションを取っている(と思われる)当人たちが、自らのコミュニケーションを振り返り、結局何を伝えたかったのか考えて言葉にしたもの、つまりコミュニケーションの当人たちが考える自らの意図・欲望
- ②それらのコミュニケーションを傍から観察して、コミュニケーションを取っている当人たちが何を意図しているのかを推測して概念化する、つまり観察者が考える当人たちの意図・欲望

とが、合致しているとは限らない。あくまでルーマンが言う「システム」とは、観察者自身が想像した被観察者たちの意図・欲望なのではないか。

つまり、ある振舞いを行為とみなすかどうかは、内在的な意図が振舞いに付随しているかどうかではなく、社会的状況において、すなわち、コミュニケーシ

ョンにおいて、選択が行為者に帰属されるかどうかによるのである。
ただし、行為が社会的状況においてのみ可能であるというのではないということには注意が必要である。ひとりで行う行為、例えば、ひとりで散歩をするといった行為も、コミュニケーションにおいて、特定の記述を与えられることによって、はじめて行為とみなされ得るという意味で社会的行為なのである。(前田氏, 1999)

結局、これらも観察者の主観によるものだ。観察者がメタな意図を（主観的に）見出したかによって、行為かどうかを判断する、ということに結果としてなってしまうのである。

例えば、「何故あなたはポンプを押しているのか」という問に対して「水槽に飲み水を補給するためだ」という答が与えられたならば、「彼は水槽に飲み水を補給している」と言うことができる。つまり意図による説明は行為を再記述することによって、他のコンテキストにその行為を位置づけ、解釈を与えるのである。(前田氏, 1999)

上記の事例において、例えばルーマンが、Aさんは「水槽に飲み水を補給するため」に「ポンプを押した」のだと判断したとしても、それはルーマン自身の見解であり、それが果たして社会システムによるものなのかどうか、そんなことが分かるのか、という問題も出てくる。

社会システムと言ってみたところで、結局は観察者（あるいは行為者自身）一人一人の主観でしかないのだから。

V. 意図→行為の因果関係は成立しない

欲望とは言葉・概念である、私たちが実際に体験したことは（もし実際にそうしたのであれば）「〇〇したい」と呟いた・考えた・メモした、などの具体的行為のみである、ということについて述べた。

因果関係とは、私たちの体験と体験、出来事と出来事との”関係”を認めることであるから、体験していないこと（つまり出来事でさえないこと）については因果関係を認めることさえできない。つまり、意図→行為、という因果関係はそもそも成立しないのである。

さて、既に伝統的な行為概念で述べたとおり、「明日、郵便局へ行って切手を買おう」などと思うことがあるのは否定できない事実である。しかし、すべての行為にそのような意図を求めることはできない。特に、習慣化された行為などには、そのような具体的な心的作用としての意図は見いだされないだろう。それにもかかわらず、そのような行為も意図的行為とみなされる。それは心理システムにとっての意図の二面性を考慮しなければ、理解できない事態である。一方で、心理システムは社会システムと同様に、行為の意味を処理するための形式として意図を用いる。他方、心理システムにおいて、その時点でまだなされていない行為を為そうという意図が生じることがある。後者の意図はそれ自体一つの出来事であり、したがって過程であり、前者の構造としての意図とは区別される必要がある。この区別によって、意図と行為の関係をめぐる議論の混乱の原因が明らかになる。反因果説の論者が構造としての意図によってすべての意図を説明しようとしてきたのに対し、因果説を支持する論者は過程としての意図によってすべての意図を説明しようとしてきたのである。前者の構造としての意図と行為との関係はこれまでの議論ですでに明らかにしたように、因果関係であるとは考えられない。では、後者の過程としての意図と行為との関係はどうだろうか。もし因果関係があるとすれば、それは菅豊彦が指摘するように、意図と行為の間ではなく、意図と振舞いの間の関係だろう。つまりこの問題を解くためには心身問題に答を与えなければならない。残念ながら、現時点の私にはこの問題に答を与えることはできない。ただ、この問題について一つだけ言えることは、もし身体システムがオートポイエティック・システムであるならば、身体システムの作動が心理システムによって規定されることはあり得ないだろうということである。（前田氏，1999）

上記の文章を分析してみよう。

「明日、郵便局へ行って切手を買おう」などと思うことがあるのは否定できない事実である。しかし、すべての行為にそのような意図を求めることはできない。（前田氏，1999）

これは確かにそうである。とくに異論はない。

習慣化された行為などには、そのような具体的な心的作用としての意図は見いだされまいだろう。それにもかかわらず、そのような行為も意図的行為とみなされる。それは心理システムにとっての意図の二面性を考慮しなければ、理解できない事態である。一方で、心理システムは社会システムと同様に、行為の意味を処理するための形式として意図を用いる。（前田氏，1999）

ここで「行為の意味を処理するための形式として意図を用いる」というのは、社会システム云々の話ではなく、あくまで行為の観察者の主観的な判断である、ということには既に（私が）述べたことである。

他方、心理システムにおいて、その時点でまだなされていない行為を為そうという意図が生じることがある。後者の意図はそれ自体一つの出来事であり、したがって過程であり、前者の構造としての意図とは区別される必要がある。この区別によって、意図と行為の関係をめぐる議論の混乱の原因が明らかになる。反因果説の論者が構造としての意図によってすべての意図を説明しようとしてきたのに対し、因果説を支持する論者は過程としての意図によってすべての意図を説明しようとしてきたのである。（前田氏，1999）

この指摘ももつともである。ただし、前田氏の言う“後者”の意図に関しても、意図（欲望）そして因果関係というものの性質を厳密に分析してみれば、答えが明らかとなってくる。

私たちは実際に何を体験し、何を体験していないのか・・・欲望そのもの、本体のようなものを私たちは体験していない。”意図”とは、あくまで抽象的な言葉であり、私たちの具体的な体験ではない。それでは実際に体験しているのはどんなことであろうか？

- ・「〇〇したい」と思ったりしゃべったりしたこと
- ・メモを取ったりしたこと

・思ったり喋ったり、メモを取ったりした後で、行為する前に様々な想像をしたり計画を立てたりすること

つまり、因果関係を考えるのであれば、“意図と行為”ではなく、これら実際に体験した具体的経験や行為の関係を考えなければならないのではなかろうか。そして、実際に前の日に考えた、あるいはメモした、そして次の日に行為した、その二つの事象の間にどんな具体的な“関係”があるのかどうか、何かメカニズムでもあるのか、それは因果関係を認めた時点においては私たちの直接経験には現れていない。つまり“謎”である。結局は、(行為者あるいは行為の観察者が)体験(出来事、事象、現象)と体験との関係を認めた、という事実があるだけなのだ。

意図や行為にまつわる“メカニズム”を把握したいと思えば、前田氏の、

もし身体システムがオートポイエティック・システムであるならば、身体システムの作動が心理システムによって規定されることはあり得ないだろうということである。(前田氏, 1999)

という見解とは異なるが、結局は

- ・しゃべったり、メモしたりすることと脳の記憶の関係
- ・何らかの意図を明確に概念化したときの脳の働きと、実際の行為との関係、など

といったふうに、自然科学的に要素を分解し、それぞれの関係を検証するしかない。そして、それらから過去の体験の関係を類推するしかないのであるが、意図と行為にまつわるすべての要素を抽出できたと断言することは困難であろうし、仮に一定程度、メカニズムが把握できたとしても、実際のところは、過ぎ去ってしまった体験であるから、本当にそのようなメカニズムによって「〇〇したい」と思った(呟いた、メモしたなど)こととその後の行為が繋がっていたのか、それを確実に説明することは不可能である。ただ類推するのみである。

そして、それら分析のために、わざわざ“社会システム”や“コミュニケーション理論”を持ち出すまでもないのだ。ルーマンのコミュニケーション理論は、前田氏の記述を見る限りにおいて、結局は、行為の観察者による行為者の意図(=欲望)への主観的判断・推測にすぎず、あくまで行為の観察者によるストーリー構築以上のものではない。